

村研大会の印象

安原

茂

二日間の村研大会を顧みて感じるものの一つは、まとまつた結論は出なかつたものの、昨年大会に比べ、共同討議が活発であつたといふことである。昨年は、問題が問題であつたためか、社会学の方からの発言はさほど活発ではなかつたし、討論とまでゆかなかつたと感じた。今年は共同討論のきつかけが、安保問題に関する意識調査によつて与えられたといふためか、種々の意見が活発に出されたと思う。しかし、卒直に見れば、そこに出されたのは、種々の観点であり、それらの観点が互いにかみ合い、噛み合いながら、共通の論点を得られ、その上で、事実の把握がいれば村研の集団的認識として深められてゆくような討論ではなかつた。勿論、問題の性質上、まとまつた結論が得られるものではないであろうし、むしろ種々の観点が出されたといふことが一つの成果であつたといえるかもしれない。しかし、それにしてもやはり、事実を分析する論理構造、その基本的な理論的範疇や方法論について、一歩突込んだ討論が必要だつたといふのは望蜀にすぎぬであらうか。

しかし、時間の制約もあるし、こうした機会をあまり知らない私だけの印象であるかもしれない。それを念頭におきながら、共同討論の中で感じたことを記してみたい。

農民の政治的意識と行動を規定する条件を考へる場合、最も重要なのは、言うまでもなく農民存在の構造である。意識と存在についての的方法論的配慮は、自明であるだけに、看

過されやすいこともある。その場合、ある意識を、存在条件の異なる他の存在の意識と無媒介的に比較することによつて、性急な主観的解釈が生じる場合がある。たとへば、自民党を支持しながら安保問題には無関心であつたり、知らないでいたりする農民がある場合、それは、A自民党が明確な意識の上に立つて支持されているのではないことを強く示すものと解釈するのが正しいであろうか。自民党を支持する明確な意識とは何か、がまず問われなければならないが、それは推くとしてもこのような解釈は、自民党支持イコール安保賛成という、いわば論者自身の意識を基準にして農民の意識を測定することにより、意識の構造的屈折の把握を失わせるものではないかと思わせる。それでは、プロクルステスの寝台にかけられたように、多くの貴重な剰余がこぼれ落ちてしまうだろう。しかし、また存在条件に対する過大な評価にも疑問を感じる。農民意識を村落共同体的秩序の中に埋没させ、かつ埋没せしめる契機のみがとりあげられるならば、それは逆の危険に陥るものである。農民の受動的な意識とともに、能動的な行動についてたとえ極めて特殊なものであるにせよ、特殊の中に普通のモメントを見出さなければならぬ。こうした問題に一つの手がかりを与えるものとしては、たとへば農民組合に向う意識と、農業協同組合に向う意識、政治意識と宮農意識との交錯をあげることでもきよう。それは否応なしに、農民存在の構造的基盤にボーリングすべき問題を

示すものである。私は、報告ではこの点にあまり触れる余裕がなかったが、今後も考えてみたい。

とここで、意識を、存在と関連させて理解すべきであるとして（ここでいうのは意識が存在に還元することではないことはいうまでもない）、当然、そこで、農民存在をいかに理解すべきかが問題になる。単に統計的平均としての差別を捨象した農民像でなく、ティピカルな農民のイメージを、またリアルな農村社会のヴィジョンを、どのように前提とし得るかの問題である。土地所有による人格的支配を構造的な軸とする農村が、資本の非人格的支配を軸とする農村に変わった農地改革以降の過程の中で、並立する自作農群という拡散したヴィジョンが現われ勝ちである。それは、状況としては、大衆社会の農村版を生み出し兼ねない。しかし、現段階における農民層分解の基調を念頭におけば、様相は異なってくるだろう。討論の中で、一口に農民、農民といわれるとき、それはいかなる農民を指すのか、分解の現実をふまえた上で、なおそれは言われているのであろうか、とふと疑問に思った。その意味で「階級」と「階層」概念が混同されているのではないか、という島崎会員の指摘は、スコラスティックなセンスとなく、現実分析の理論にかかわる問題として重要であつたと思う。

討論の中で、具体的な実例がしばしば求められたが、それへの答えは決して十分ではなかつた。それは討論参加者のもつ実証例が無

いわけでなく、その実例の有する現段階的意義をいかに考えるかの、理論、方法論について、村研内部の検討がまだ不十分であること

のあらわれではなかつたであらうか。ということはいわねば、具体的な数多くの調査の中から、現在の農村を把握すべき理論的一般化、体系化が、社会学の中にも行われていることを否定するものではない。たとえば、松原会員の講座社会学所収論文や、今回の大会における中島会員の発表、島崎会員の一連の諸論文などはそのような理論的一般化への試みであり、それぞれの方法論、理論的抽象の問題が、具体的な実例にそくして交錯させられねばならなかつたのではないか、と思われた。私自身の個人的な関心から言えば、マルクスが、ドイツ・イデオロギー以降資本論に至るまで、 \wedge 生産関係 \vee とも重視した \wedge 交通関係 \vee をいかに具体化するかは、農村社会構造の変動を究明するにあつても重要な意味をもつと思つているが、村研の討論はそのような問題を論じる場所ではないだろう。それにしても、実例の単なる例挙はいうまでもなく、それだけでは理論に転じない。実例をあげての討論が、理論化への階梯となる。そのような姿勢が、さらに実り豊かな成果を生み出すものではなかるうか。このようなことは言わでもがな、のことであるかもしれない。そうであれば、未熟の過言として許して戴きたい。

事実は誰にも開かれている。しかしそれにもとずく判断は多様である。その判断の多様

のよつてきたるところについて、卒直な討論が、時間が許せばもつと欲しいところだつたと思う。

農民層の分解という事実があるのかないのか、それがどのような意味をもつのか、という一点さへ、必ずしも討論の中で明確ではなかつたし、共同体的秩序という論点と噛み合わせられなかつた不満が残つた。それは、一時的に言えば、理論と実証の問題であり、そしてまた理論そのものの問題であろう。一つのデータにもとづき、それを多方面から、集的に分析し、討論するのも一つの方法ではなかつたかとも思う。共同討論のためにはあらかじめ数名の会員の共同調査などで準備されたデータが全会員に事前に配布され、それを中心に、大会当日の個別報告を参考としつつ討論が行われれば、多くの論点の単なる提出以上の効果があげられるのではなかるうか。共同討論が、個別報告の集積であるのではなく、個別報告のそれぞれの意味が、共同討論によつてさらに明確となる、といった形での討論もあり得ると思う。勿論そのためには、村研自体の総合的な研究企画なり、体制なりが必要であるだろうが。しかしそれでこそまた村落社会研究会であるのではないであらうか。

以上、共同討論の中で感じついたことを書き記したが、不満や注文ばかりになつてしまつた。或いは共同討論に対する過大の期待によるものかもしれない。勿論、卒直な討論が行われ、終始、活潑で真鍮な時間が過ぎたこ

とは、このような機会をあまり経験しない私には貴重な経験であつた。特に会場を階下に移してからの、熱つばい（と私には感じられた）空気は忘れられない。それだけに私自身その一人で申し訳ないと思つたが帰りの列車の時間に追われたのが残念だつた。

個別報告はそれぞれ私には有益であつた。東北村落の地主制についての報告について同族結合について質問され、その積極的な意味について否定的な回答があつたのも印象的であつた。なお、個別報告についての質疑の時間がもう少しなつかとれなかつたものか、と思つた。総括質問では、時間の都合で省略されたものもあつたが、質問要旨だけでも発表されるとよかつたのではなからうか。それは、それぞれの報告についての認識をより深めるのに役立つように思う。

ともかく種々の意味で、私には刺激的な大会であつたことを感謝している。